

ケベックのフランス語の特徴について

近 藤 野 里

1. はじめに

カナダの2つの公用語は英語とフランス語であり、特にケベック州はフランス語のみを公用語としている唯一の州である。そして、ケベック州は、カナダで唯一、フランス語話者が大多数を占める州でもある。ケベック州で話されるフランス語は一般的に *le français québécois* (ケベック・フランス語) と呼ばれている。2011年の調査によると、カナダの人口の23.2%がフランス語を、そして75%が英語を公用語として使用しているⁱ。2006年のケベック州のフランス語と英語それぞれを母語とする人口の割合はそれぞれ79%と7.7%である (cf. Paillé, 2011 : 20)。

カナダのフランス語はヨーロッパ大陸で話されるフランス語とは、発音、語彙、そして統語的な側面において異なる特徴を持つ。本稿では、まずケベック・フランス語の歴史について、要点を述べる。また、本稿の目的は、ケベック・フランス語における代表的な言語特徴を、発音、語彙、統語的な側面からそれぞれ概観することである。さらに、ケベック・フランス語における規範に関わる問題についても扱う。ここで先に断わっておくが、カナダでは他にもオンタリオ州の北東部やニューブランズウィック州ⁱⁱにおいてもフランス語が話されているがⁱⁱⁱ、これらの変種については本稿では扱わないこととする。

2. ケベック・フランス語の歴史

1534年にジャック・カルティエがアメリカ大陸に到達し、セントローレンス湾周辺の地を「ヌーヴェル・フランス (Nouvelle France)」と命名した。これが後のケベック州の前身となる。その後、1604年にサミュエル・ド・シャンプランにより定住植民地が開拓され、現在のヴィル・ド・ケベック (ケベックシティ) が建設された。1759年に英軍に占領され、イギリス領となった。この英国による征服の後、フランス系カナダ人の大半が、英語系カナダ人への同化を避け、カトリック教会が主導する社会に生きた。それでは、ヌーヴェル・フランス建設以後、この地における言語状況はどのようなものだったのだろうか。以下に引用する Remysen (2003: 36) はその言語状況を以下のように説明している。

« À l'époque de la Nouvelle-France, il y a une liberté dans le développement linguistique et les particularismes lexicaux des Canadiens français ne semblent incommoder personne. [...] Ce n'est qu'à partir du XIXe siècle que se développe une conscience linguistique et elle sera marquée par un sentiment de culpabilité linguistique particulier. »

Remysen (2003 : 36)

「ヌーヴェル・フランスの時代には、言語の発展における自由があり、カナダの語彙的な特異性は誰も不快にさせるようなことはなかったように思える。言語意識が発展するのは19世紀からであり、その意識は特異な罪悪感によって特徴づけられることになったようだ。」

つまり、ヌーヴェル・フランスの時代には、その後の時代にフランス系カナダ人 (以降、ケベコワと呼ぶ) たちが抱き続けたフランス語に関する劣等感はなかったということである。言語は変化していくのが当然であり、フランスで話されるフランス語も変化する、徐々にケベックを訪れるフランス人たちがケベック・フランス語に対する違和感を強くしていく様子が Gendron (2007) の著作で詳細に説明されている。ケベックでは、20世

紀前半までは、聖職者がたゆまず大衆の言葉遣いを監視し、その結果一般のケベコワは自分たちの言葉に対する劣等感を強めていった (cf. 矢頭 2005 : 340)。1960年代の「静かな革命」と呼ばれる社会改革はケベコワたちにとっては意識改革となった。矢頭 (2005 : 399) はこの「静かな革命」について以下のように述べている。

「フランス系はケベック州の多数派でありながら、経済的には被「征服」者の地位に甘んじ、社会的には教会の指導下で内向的な殻に閉じこもり、文化的にも自信がもてない状況であったが、「静かな革命」以降、徐々にケベック州を「我が家」であると内外的に主張するメンタリティをはぐくみ、新しい体系を形成していった。自分たちを積極的に「ケベコワ (Québécois)」と呼び、ケベコワこそが「我が家の主人 (maître chez nous)」という意識を持ち始めたのもこの頃であった。」

矢頭 (2009 : 155-156)

1969年にフランス語推進法 (Loi pour promouvoir la langue française) が初めて施行され、その後1974年にフランス語をケベック州の唯一の公用語とする「公用語法 (Loi sur la langue officielle)」が施行された。そして、1977年に「フランス語憲章 (101号法) (Charte de la langue française)」が制定されたことにより、ケベック・フランス語は転機を迎える。以上に引用した Remysen (2003) や矢頭 (2009) が指摘しているように、それまでケベコワの自分たちが話す言語への意識は複雑なものであった。英語話者の経済的地位と比べると、フランス語話者は劣等的地位にあり、フランス語は劣等言語であるという意識、そしてフランスの標準フランス語とケベック・フランス語が異なるということに関しても劣等感を持っていた。このような劣等感は、フランス語憲章の制定後、ケベック・フランス語の整備や教育改革とともに徐々にではあるが薄らいでいったことが考えられる。

3. 発音の特徴

ケベコワの訛りは17世紀にヌーヴェル・フランスに定着した植民者の出身地方の方言もしくは俚言 (patois) を反映したものであるという見解がある^{iv}。ただし、最近の研究ではこれに異を唱えるものも多い。以下に引用する Morin (2002 : 40) の見解は非常に興味深い。

« (...) les caractéristiques générales de la prononciation moderne du français au Québec dérive essentiellement de la prononciation recherchée de la noblesse et de la haute bourgeoisie parisienne du XVIIIe siècle. Ceci n'exclut pas la survivance de quelques traits de prononciation populaire parisienne ou de prononciations d'autres régions, mais dans l'ensemble, ceux-ci semblent avoir été relativement secondaires dans le développement de l'accent québécois moderne. »

「ケベック州のフランス語の現代的発音の一般的な特徴は本質的には、17世紀の貴族階級やパリのブルジョワ階級の気取った発音から派生している。これは、パリの大衆的発音もしくは他の地方の発音のいくつかの特徴の残存を排除するわけではない。また、これらの特徴というのは現代のケベックの訛りの進化において、わりあい副次的なものであったように思われる。」

Morin (2002 : 40)

17世紀のフランスの言語状況は、今日我々が知っているフランス語のそれとはまったく異なるものである。17世紀のフランスでは、都市部では「地方フランス語 (français régional)」が、それ以外の地域では俚言 (patois) が話されていたはずである。また、都市部で話される「地方フランス語」は、パリとその周辺部イル＝ド＝フランスで話されているものが規範にはなるが、地方的特徴を内在させたフランス語だったはずである。Morin (2002 : 54) は、ヌーヴェル・フランスへの入植者の多くは都市部の出身であり、彼らは俚言ではなく、少なくとも地方フランス語を話していたはずである主張している^v。さらに、Martineau (2012 : 245) は Choquette (1997)

やLarin (2000) による人口学的な研究を引用しながら、植民者の大部分がフランスの都市部出身で、かつその中には社会的エリートも含まれていたことを強調している。よって、ケベック・フランス語の特に発音面に関しては、パリとその周辺で話されていたフランス語の規範の影響を受けたはずである。ただし、発音以外の特徴、特に語彙の特徴については、地方フランス語もしくは俚言の影響があることは否定できないのではないだろうか。

この節では、ケベックのフランス語の発音の特徴として主に「長母音」、「狭母音の弛緩」、「歯茎音の破擦化」について扱う。

(a) 長母音

ケベック・フランス語では母音の長さが、長母音として、もしくは二重母音として保持されている。「保持」という言葉を用いる理由は、現代フランス語にはない音韻的な母音の長さが、入植が行われた頃に本国のフランスで話されていたフランス語の規範的な音韻体系に存在したためである。フランスのフランス語の音韻体系において、長母音と短母音の対立は少なくとも19世紀末には消失している。以下では、まずフランスでの母音体系の変化を見ていきたい。

i i: y y: u u:	i i: y y: u u:	i y u
e e: ø ø: o o:	e e: ø: o:	e ø o
ɛ ɛ:	ɛ ɛ: œ ɔ	ɛ ɛ: œ ɔ
a a:	a ɑ:	a ɑ
17世紀末	移行期 (18~19世紀)	20世紀半ば

表1：母音体系の変化 (Martinet (1959) を基に作成)

18世紀初頭のフランス語の母音体系についてはGile Vaudelin (1713, 1715) のフランス語記述から推測可能である。当時の母音体系は短母

音 /i, e, ε, a, o, ø, u, y/ と、それぞれに対応する長母音 /i:, e:, ε:, a:, o:, ø:, u:, y:/ で形成されていた。その後、中舌円唇短母音の広母音化 (ø>œ, o>ɔ)、後舌化 (a:>a) が起こる。20世紀半ばには /ε:/ のみが音韻的な長さを持つ音素として残った。よって、特定の語彙を例外とすれば、少なくとも現代の標準フランス語においては音韻的な母音の長さは消失している。ただし、フランス語には音声的な母音の長さがあるのも事実である。音声的な母音の長さというのは、閉音節における語末子音の性質によって決定される長さのことである。Delattre (1966 : 114) によれば、語末の閉音節における子音の性質によって、先行する母音の長さが音声学的に異なるという。

1. p, t, k	très brèves
2. l, m, n & f, s, ʃ	brèves
3. b, d, g	moyennes
4. ɲ, j	longues
5. r, v, z, ʒ	très longues

表2：子音の持つ性質 (cf. Delattre, 1966 : 114)^{vi}

特に閉音節において [r v z ʒ] もしくは子音クラスター [vr] のような母音を長く発音させるような子音がコーダに位置する場合に、母音は音声的に長くなることが指摘されている (Côté, 2010b : 49)。

(1) 例 : *vise* [vi:z], *sève* [sɛ:v], *garage* [gara:ʒ], *sourd* [su:r]

ケバックのフランス語の母音体系は基本的には16個の音素を含む以下の表のようなものだろう。

	前舌		後舌	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭	i	y		u
中狭	e ě	ø (ː)		o (ː)
中広	ɛ ɛː	œ œ̃		ɔ õ
広	a ā		ɑ (ː)	

表3：ケベックの母音体系

ケベック・フランス語では音韻的な母音の長さが保持されている (ø(ː), o(ː), ɛ, ɑ(ː))。特に語末の閉音節において長母音はさらに二重母音として発音される場合があり、それらの母音というのは、[ø, o, ɑ]および鼻母音[ě, œ̃, ɔ̃, ā]である (cf. Côté, 2010b : 50)。例えば、このような母音を含む語は語末閉音節において、以下のように発音される。

(2) côte [ko^wt], pâte [pa^wt], pense [pɔ̃^ws] (cf. Côté, 2010b : 50)

加えて、以上で既に説明した母音を長くする子音が閉音節のコーダにある場合には、短母音の二重母音化が起り、それは[r]の前で顕著であるという (cf. Côté, 2010b : 55)。

(3) vire [vi^rr] jure [ʒy^rr] tour [tu^wr]
 paire [pɔ̃^rr] peur [pœ^rr] port [po^wr]
 départ [depa^wr] (Côté, 2010b : 55)

さらに、特にケベック・フランス語では、語中音節においても、長母音が発音される場合がある (cf. Côté, 2010b)。

(4) rêve [rɔ̃^v] → rêver [rɔ̃ːve], sauve [so^wv] → sauver [soːve],
 bronze [brɔ̃^wz] → bronzer [brɔ̃ːze] (Côté, 2010b : 60-61)

フランスのフランス語においても、語中音節における長母音の発音は、音声学者 Paul Passy によって記述された 19 世紀末のフランス語では観察される (cf. 近藤, 2013)。音韻体系に限れば、ケベック・フランス語が 18 世紀頃のフランスのフランス語の母音体系に類似することは明白である。

(b) 狭母音の弛緩

ケベック・フランス語では、語末閉音節において狭母音 /i, y, u/ は弛緩化して [ɪ, ʏ, ʊ] と発音される^{vii}。以下に例を挙げる。

(5) 例 : *pipe* /pip/ > [pɪp], *tuque* /tyk/ > [tʏk], *coupe* /kup/ > [kɒp]

この弛緩化で興味深い点は、語境界での制約である。Côté (2010a : 1282) によれば、語末の子音が安定的に発音され、かつ語境界でその語末子音が次の語の母音に再音節化される場合は、弛緩化が起きるといふ。例えば、以下のような例である。

(6) 例 : *maudite amie* [mod^ɪitami] (Côté, 2010a : 1282)

しかし、Côté (2010 : 1282-1283) は語頭子音、前接辞 (*proclitique*) およびリエゾンでは、この弛緩化が自動的に妨げられると述べている。以下に例を挙げる。

(7) 語頭子音 :	<i>maudit amis</i>	[mod ^ɪ itami] *[mod ^ɪ itami]
前接辞 :	<i>Jordi t'amuse</i>	[ʒɔrd ^ɪ itamyz] *[ʒɔrd ^ɪ itamyz]
リエゾン :	<i>maudit ami</i>	[mod ^ɪ itami] *[mod ^ɪ itami]

(Côté, 2010a : 1282-1283)

(c) 歯茎音の破擦音化

歯茎音 /t/, /d/ は、狭母音 /i, y/ もしくは半母音 /j, ɥ/ の前で、破擦音 [tʰ, dʰ] として発音される。以下に例を挙げる。

<i>tigre</i>	[tʰigr]	<i>diner</i>	[dʰine]
<i>petit</i>	[ptʰi]	<i>dire</i>	[dʰi:r]
<i>tube</i>	[tʰyb]	<i>dur</i>	[dʰy:r]
<i>tunnel</i>	[tʰynɛl]	<i>dupe</i>	[dʰyp]
<i>tiens</i>	[tʰjɛ̃n]	<i>indien</i>	[ɛ̃dʰjɛ̃]
<i>tuer</i>	[tʰqe]	<i>duel</i>	[dʰqel]

表4：破擦音化の例 (Walker, 1984 : 91 より引用)

歯茎音の破擦音化は、ケベック・フランス語に限らず、17世紀および18世紀に植民地化されたアンティル諸島やインド洋のフランス語クレオールにも類似した破擦音化が見られるという (Morin, 2002 : 63)。

Côté (2010a : 1284) に従えば、破擦音化は語境界において揺れがあるようである。

- (8) 語末子音： *trente idées* [trãtide] [trãtʰide]
 前接辞： *Jean tʰimite* [ʒãtimɪt] [ʒãtʰimɪt]
champ dʰimages [ʃãdimãʒ] [ʃãdʰimãʒ]
 リエゾン： *grand iguane* [grãtigwan] [grãtʰigwan]
il est immense [ilɛtimãs] [ilɛtʰimãs]

ただし、次のような三人称の主語代名詞の倒置においては、破擦化は義務的に起きるようである (cf. Côté, 2010a : 1285)。

- (9) 例： *doit-il* [dwatʰɪl] *[dwatɪl] (Côté, 2010a : 1285)

4. 語彙の特徴

ケベック・フランス語の語彙には様々な特徴がある。矢頭（2005：341-343）はケベック・フランス語の語彙の特徴を以下のように整理している。

(1) アルカイズム (archaïsme)		pouderie (吹雪)、sou (セント)、 déjeuner (朝食)
(2) アングリシズム (anglicisme)		boss (ボス)、fun (楽しい)、 checker (チェックする)
(3) アンチ・アングリシズム (anti-anglicisme)		maïs-éclatés (popcorn), stationnement (parking), fin de semaine (weekend)
(4) その他	ケベックの特殊性を反映する語彙	cabane à sucre (メープルシロップ小屋)、 caribou (トナカイ)
	フランスのフランス語とは異なるがケベックでは広く使われる語彙	dépanneur (コンビニエンス・ストア)、 baccalauréat (学士号、フランスでは licence)

表5:ケベック・フランス語における語彙の特徴 (cf. 矢頭, 2005 : 341-343)

以上の表で示したように、矢頭（2005）はケベック・フランス語の語彙を4つに分類している。(1) アルカイズムは、入植時代に使用していた語彙が未だに残っている例である。(2) アングリシズムは、英語からの借用語である。また、それに対抗する(3) アンチ・アングリシズムは、英語の語をフランス語に置き換えたものであり、北米という「英語の海」に浮かぶケベック州での英語への抵抗が感じられる。上記の表4のアンチ・アングリシズムの例については、フランスでは英語からの借用語が安定的に使用されている。(4) その他の語彙については、ケベックの暮らしの中でケベコワ達が生み出していった語彙であるといえるだろう。ところで、矢頭（2005）が提示した語彙の分類には、フランスから持ち込まれたであろう地方フランス語もしくは俚言において使用されていたと考えられる語彙が含まれていないため、この点に関してはまた稿を改めて詳しく論じたいと思う。

興味深いのはケベック・フランス語の体系の中に、英語からの借用語で

あるアングリシズムがあると同時に、それに対抗するアンチ・アングリシズムがあるといた矛盾が生じていることである。アングリシズムのどの語を取り除き、どの語を残すのかという問題は、数多く出版されているアングリシズムの排除を目的とする辞書や言語学者の間で一致をみていないと言われている (cf. 矢頭, 2002 : 71)。

5. 統語的特徴

ケベック・フランス語には様々な統語的特徴が見られる。本稿では、主に2つの特徴についてのみ提示する。

(a) 疑問文における形態素 *-tu(/-ti)* の付加

ケベック・フランス語では、肯定か否定かを問う疑問文に *-tu(/-ti)* が付加される場合がある。例えば、以下の疑問文では、動詞 *voulez* の後ろに形態素 *-tu* が付加されている。

(10) « Vous en voulez-**tu** ? »^{viii}

形態素 *-ti* はまず « Vient-il ? » のような3人称単数形もしくは複数形の代名詞と動詞の倒置疑問文から派生しているといわれている。*il(ils)* は12世紀から語末の [l] が発音されず、これは20世紀に入るまで続いた。つまり、« Vient-il ? » は現在のように [vjɛtil] ではなく、[vjɛti] と発音されていたわけである。この « *-t-il(s)* ([ti]) » が疑問形態素として徐々に独立するようになったことが考えられる。

Picard (1992 : 68-69) は *-ti* の定着を以下のように説明している。イタリア語やスペイン語で見られるように、もともとフランス語でも主語と動詞の単純な倒置による疑問文は可能であった(例: *viens-tu ? est ta mère morte ?*)。徐々に、①主語が代名詞のパターン (*viens-tu ?*) と同時に、②主語が名詞の場合には、名詞を文頭に置き、さらに主語代名詞を倒置させるパターン

(*Ta mère est-elle morte ?*)の2つの形が定着した。つまり、SN - V ⇒ V - SNの代わりに、SN - V ⇒ SN - V - Proという規則ができたわけである。そして、三人称単数形と複数形へと類推的拡張が起こったと Picard (1992 : 68) は述べている。

(11) a. I vient-i ? (Il vient-il ?)

b. I viennent-ti ? (Ils viennent-ils ?)

(Picard, 1992 : 68)

最終的には、倒置の [ti] の部分が切り取られ、「-ti」として疑問を表す形態素マーカーとして定着していったことが考えられるだろう。これはケベックに限らず、フランスのフランス語でも民衆の間では20世紀初頭まで使用されており (cf. Bourciez, 1910 : 706)、20世紀半ば頃に古風な表現になったと考えられる。さらにケベックでは、-tu [ty] が -ti に入れ替わって定着したわけである。

また、最近の研究では、-tu が疑問文に付加されるだけでなく、感嘆文、命令を示す場合、または驚きを示す場合などに用いられるという Vinet (2000) の指摘がある。

(12) a. C'est-tu damnant !

b. Tu vas-tu sortir de d'là !

c. Fak là, je la vois-tu pas qui tombe à terre.

(Vinet, 2002 : 139)

(b) 疑問代名詞と関係代名詞に後続する従位接続詞 que

ケベック・フランス語では疑問代名詞もしくは関係代名詞に従位接続詞 que が後続する場合がある (cf. Eychenne & Walker, 2010 : 259)。例えば、それは以下のような例である。

(13) *Qui que t(u) as vu ? (= Qui as-tu vu ?)*

Quand que tu viens ? (= Quand viens-tu ?)

Le gars avec qui que je travaille (= Le gars avec qui (avec lequel) je travaille)

Les livres que vous aviez coutume de suivre la messe (= les livres avec lesquels ...)

(Eychenne & Walker (2010 : 259) の例を引用)

他にも、英語の語順の借用、指示詞 *là* の多用、単純未来を意味する近接未来の使用、提示表現 « *c'est des ...* » など様々な統語的特徴がケベック・フランス語において観察される。ただし、以上に挙げた特徴は常に使用されるわけではなく、話者がレジスターに合わせて選択する可能性が高いだろう (cf. Bigot, 2011)。

6. ケベック・フランス語の規範

上記で概観してきたように、ケベック・フランス語はフランスの標準的フランス語とは異なる言語特徴を内在させている。北米の「英語の海」の中に、文字通りぽっかりと浮かんだフランス語を公用語とする唯一の州であるケベック州では、英語が優勢な状況においてフランス語を守るために、そしておそらくケベコワのアイデンティティを保持していくためにも、1960年代以降、フランス語憲章の制定、フランス語局の設置 (Office Québécois de la langue française)、ケベック州用語バンク (Banque de terminologie du Québec) の設立など、様々な言語政策が行われてきた (cf. 矢頭 2002)。

ところで、ある言語の地位を安定させるためには、規範を設定することが大変重要である。Lodge (1997 : 208) は「規範が与える規則は、上層から強制され、意識的な学習の努力が必要とされる^{ix}」と述べている。この規範を成立させるためには、規則の目録を作成すること、つまり「規範を成文化すること (codifier)」が必要となる。成文化に必要とされるのは、「規範

的規則 (règles prescriptives)」である (cf. Lodge, 1997 : 206-207)。成文化の際には、最も品位があると考えられる社会階層が参照され、彼らが使用することばが規範的規則として書き出されることから、成文化は社会的な側面を持つものである (Lodge, 1997 : 211)。規範化はもちろん、フランスのフランス語においても、16世紀半ばから絶えず行われてきたことである。

それでは、ケベック・フランス語の規範とは何を意味するのだろうか。ケベック・フランス語の規範には諸説あり、大きく2つに分けるならば「国際的な標準フランス語の規範」に従っているとする意見と、「ケベック・フランス語特有の規範」が存在するという意見があるだろう。ただし、Maurais (2008 : 8) によると、専門家の間でも未だに意見の一致がなされたわけではないようである。また、Maurais (2008 : 8) が提示した1971年と2004年に行われたケベック・フランス語局の「ケベック州民の言語調査」についての世論調査に見られる、ケベック州のフランス語話者の言語意識にも大きな違いが見て取れる。例えば、「フランス人のような発音で話したいですか」という質問に対し、「はい」と答えた人が1971年には31%だったのに対して、2004年には12%に減少している (Maurais, 2008 : 8)。同様に、「フランス人と同じ語彙を使って話したいですか」という質問に対して、「はい」と答えた人が1971年には45%だったのに対して、2004年には32%に減少している (Maurais, 2008 : 8)。このような調査からは、ケベック・フランス語の話者であるケベコワ達が一様に、フランスの規範に従う、もしくはフランス的な話し言葉を使用することを望んでいるとは言い難いことがうかがえる。

それでは、ケベックのフランス語にも規範があり、それをラジオカナダのフランス語と解釈した場合にはどうだろうか。ラジオカナダが提供している『ラジオカナダでのフランス語の質 (La qualité du français à Radio-Canada)』という文献には、一般事項としていくつかの条文が書かれている。以下は、その一部を引用したものである。

「1.1.1. ラジオやテレビなどのフランス語放送、また同様にラジオカナダのインターネットサイトで使用されるフランス語はカナダで使用される正しいフランス語である。」

「1.1.2. カナダで使用される正しいフランス語は典型的な言い回し、語彙的な特性、地域的な発音を持つものである。」

「1.1.9. その言語的影響を自覚し、ラジオカナダのラジオおよびテレビは、放送で(…)使用する言語が規範的になるように全ての必要な措置を取るものである。」

(La qualité du français à Radio-Canada, p.1)

発音に関する章において興味深い点は、カナダで使用されるフランス語では地域的な発音が使用されると断りつつも、「2.1.2. (…) 使用される発音は、残りのフランス語圏においても使用される発音にできるだけ近づかなければならない。(La qualité du français à Radio-Canada, p.4)」という項目も見られることである。これには、フランス語圏全体でも理解されるフランス語を話さなければという意識も感じられる。ただし、実際にラジオカナダの放送を聞けば、第三節に挙げた発音特徴が聞こえてくるのは、珍しいことではない。ある特定の発音の特徴が抑えられることはあっても、全く使用されないわけではないということが推測できるのではないだろうか。

統語的な間違いや文法的な間違いに関しては、「4.1.1. 事前に原稿が用意されている放送と即席演説が重要な位置を占める放送においても、統語と文法の規則の遵守は必要不可欠である。(La qualité du français à Radio-Canada, p.8)」と書かれている。これは、特にアナウンサーといった公の場で話す職業に従事する人に限定されている可能性もあるだろう。

ラジオカナダの放送をコーパスとして使用したBigot (2011) の研究対象となったのは、アナウンサーではなく、知識人の会話であり、その言語特徴の分析で明らかになったことは非常に興味深いものである。Bigot(2011) はラジオカナダのインタビュー番組でインタビューされる側として招待さ

れた知識人の話し言葉に関して調査を行い、彼らの話すフランス語が標準フランス語の規範の基礎である Grevisse-Goosse の『良き慣用 *Le bon usage*』にかなり近いものであることを明らかにしている。ただし、Bigot (2011) の調査では、これに従わない特徴が2つあることも明らかになった。そのうちの一つは、肯定文において単純未来ではなく近接未来を使用する傾向が強いことである。以下に例を挙げる。

(14) « *Je vais la voir demain.* » vs « *Je le verrai demain.* »

(cf. Bigot, 2011 : 7)

そして、もう一つは名詞句が複数形であるにもかかわらず *c'est* (*ce sont* ではなく)を使用するものである。例えば、これには以下のような例がある。

(15) « *C'est des personnes très sympathiques.* » vs « *Ce sont des personnes très sympathiques.* »

(cf. Bigot, 2011 : 8)

Bigot (2011) は、これら2つの特徴がケベック・フランス語の規範として受け入れられつつある点を主張している。Bigot (2011) は「ケベック州ではどのフランス語を教えるべきか？」という問いに、ケベックのエリート達によって使用される規範的な言い回しは『良き慣用』の一部をなしているため、そのような規範を教えることになるだろうという。興味深いのはむしろ、レジスターの使い分け、つまり異なるレジスターにおいてどの変異を使用することが可能なのかを教える必要があるという Bigot (2011) の意見だろう。

ケベック州で話されるフランス語の規範に関しては、今後も専門家の間で様々に議論され、簡単に意見の一致がなされないように感じられるが、メディアを通して媒介していく言語の影響力が大きいことだけは確かであろう。

終わりに

本稿では、ケベック・フランス語の代表的と考えられる特徴について、先行研究で既に指摘されてきたことを要約しながら、発音、語彙、統語的特徴という観点から概観した。ただし、本稿で提示した特徴以外にもケベック・フランス語には様々な特徴がある。さらに、ケベック州内においても地域の変種が存在するため、それらの変種についても整理することが必要である。加えて、レジスターの違いによって表れる特徴の違いについても、より深い社会言語学的考察を与える必要があるだろう。また、本稿ではケベック・フランス語における規範の問題に関しても拙いながら考察を行った。興味深い点は、1971年と2004年の「ケベック州民の言語調査」によって明らかになった、ケベコワの間で共有される言語意識の大きな変化である。つまり、18世紀の英国による征服以後かかえていたであろう劣等感が和らぎつつあることは否定できない。1977年のフランス語憲章制定後に教育を受けた若い世代の英語系とフランス語系の両方のケベコワについて、矢頭（2013：60）は「[...] 若い世代のケベック州民は『フランス語憲章の申し子たち』と呼ばれ、それ以前の時代に教育を受けたケベック州民とは言語意識を異にする。」と述べている。ケベック・フランス語の話者の言語意識の変化および共有される規範に対する意識の変化は今後も観察を続けるに値するだろう。

参考文献

- Bigot, D. (2011). De la norme grammaticale du français parlé au Québec. *Arborescences : revue d'études françaises*. 1, pp. 1, 18. <https://www.erudit.org/revue/arbo/2011/v1/n1/1001939ar.pdf> (最終アクセス日：2016年9月26日)
- Bourciez, É. (1967) [1910]. *Éléments de linguistique romane*. Paris : Klincksieck.
- Côté, M-H. (2010a). Le statut des consonnes de liaison : l'apport de données du français laurentien. *2^{ème} Congrès Mondial de Linguistique Française*, sous la direction de Franck Neveu, Valelia Muni Toke, Thomas Klingler, Jacques Durand, Lorenz Mondara & Sophie Prévost. Paris : Institut de Linguistique Française, pp. 1279-1288.

- Côté, M-H. (2010b). La longueur vocalique devant consonne allongante en contexte final et dérivé en français laurentien. *Vues sur les français d'ici*. Québec : Presses de l'Université Laval, pp. 49-75.
- Delattre, P. (1966). *Studies in French and comparative linguistics*. The Hague : Mouton.
- Eychenne, J., & D. Walker (2010). Le français en Amérique du Nord : éléments de synthèse. *Les variétés du français parlé*, (éd) Sylvain Detey, Jacques Durand, Bernard Laks & Chantal Lyche. pp. 249-264. Paris : Ophrys.
- Gadet, F., R. Ludwig (2015). *Le français au contact d'autres langues*. Ophrys : Paris.
- Gendron, J-D. (2007). *D'où vient l'accent des Québécois ? Et celui des Parisiens ? Essai sur l'origine des accents. Contribution à l'histoire de la prononciation du français moderne*. Québec : Presses de l'Université Laval.
- Lodge, A. (1997). *Le français, Histoire d'un dialecte devenu langue*. Paris : Fayard.
- Martin, P. (2002). Le système vocalique du français du Québec. De l'acoustique à la phonologie. *La linguistique*. 38, 2, pp. 71-88.
- Martineau, F. (2012). Normes et usages dans l'espace francophone atlantique. *L'introuvable unité du français. Contacts et variations linguistiques en Europe et en Amérique (XIIIe-XVIIIe siècle)*. Québec : Presses de l'Université Laval. pp. 227-317.
- Maurais, J. (2008). *Les Québécois et la Norme : l'Évaluation par les Québécois de leurs Usages linguistiques*. Office québécois de la langue française. https://www.oqlf.gouv.qc.ca/etudes/etude_07.pdf (最終アクセス日 : 2016年9月26日)
- Morin, Y-C. (1983). De l'ouverture des [e] du moyen français. *Revue québécoise de linguistique*. 12, 2, pp. 37-61.
- Morin, Y-C. (2002). Les premiers immigrants et la prononciation du français au Québec. *Revue québécoise de linguistique*. 31, 1, pp. 39-78.
- Paillet, M. (2011). *Les caractéristiques linguistiques de la population du Québec : profil et tendances 1996-2006*. https://www.oqlf.gouv.qc.ca/etudes2011/20110909_MPaillet.pdf
- Picard, M. (1992). Aspects synchroniques et diachroniques du *tu* interrogatif en québécois. *Revue québécoise de linguistique*. 21, 2, pp. 65-74.
- Remysen, W. (2003). Le français au Québec : au-delà des mythes. *Romanesque*. 1, pp. 29-41. <http://www.vlrom.be/pdf/031quebec.pdf> (最終アクセス日 : 2016年9月26日)
- Radio Canada, *La qualité du français à Radio-Cadana*. <http://ici.radio-canada.ca/radio/francaismicro/politique.pdf> (最終アクセス日 : 2016年9月26日)

- Statistique Canada (2012). *Caractéristiques linguistique des Canadiens, Langue, Recensement de la population de 2011*. Gouvernement du Canada. <http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/98-314-x/98-314-x2011001-fra.pdf> (最終アクセス日：2016年9月26日)
- Vaudelin, G. (1713). *Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France*. Paris : Chez La Veuve de Jean Cot et Jean-Baptiste Lamesle, Slatkine Reprints.
- Vaudein, G. (1715). *Instructions crétiennes, mises en ortographe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Silence du salut*. Paris : Chez Jean-Baptiste amesle, Slatkine Reprints.
- Vinet, M-T. (2000). La polarité pos/nég, *tu (pas)* et les questions oui/non. *Revue québécoise de linguistique*. 28, 1, pp. 137-149.
- Walker, D. (1984). *The pronunciation of Canadian French*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- 近藤野里 (2013). 「19世紀末フランス語の母音体系—Paul Passy (1889) によるフランス語記述を基に一」, 『ふらんぼー』 39号, pp. 88-109.
- 矢頭典枝 (2002). 「ケベック仏語の実体計画—語彙の規範化を中心として—」, 『ふらんぼー』 28号, pp. 59-77.
- 矢頭典枝 (2005). 「ケベック・フランス語の特殊性と規範化」, 『フランス語を探る—フランス語学の諸問題III』, pp. 338-349. 東京：三修社.
- 矢頭典枝 (2009). 「フランス語憲章」, 『ケベックを知るための54章』, 小畑精和、竹中豊編集, pp. 154-162. 東京：明石書店.
- 矢頭典枝 (2013). 「ケベック・フランス語憲章の社会言語学的分析」, 『ケベック研究』 5号, pp. 43-63.

注

-
- ⁱ この調査結果は Statistique Canada (2012) の報告書を参照した。また母語については、人口の58%が英語、22%がフランス語を母語としている。
- ⁱⁱ ニューブランズウィック州で話されるフランス語の変異はアカディア・フランス語と呼ばれる。
- ⁱⁱⁱ 特にオンタリオ州北東部とケベック州で話されるフランス語には、*le français laurentien* という名称が用いられることがある。
- ^{iv} Morin (2002: 39) を参照した。: « Une conception naïve, dans le grand public, sou-

vent ralayée par les médias, voudrait que « l’accent québécois » reflète surtout les usages linguistiques des dialectes ruraux des provinces d’origine des colons qui vinrent s’établir dans la Nouvelle-France du XVII^e siècle ; C’est à la Normandie, au Poitou ou à la Saintonge (...) auxquels, plus souvent qu’autrement, on attribue les influences déterminantes. »

^v Martineau (2012) が参照した文献は以下の2つである。Choquette, L. (1997). *De Français à paysans. Modernité et tradition dans le peuplement du Canada français*, Sillery/Paris, Septentrion/Presses de l’Université de Paris-Sobonne., Larin, R. (2000). *Brève histoire du peuplement européen en Nouvelle-France*, Sillery, Septentrion.

Choquette (1997:46)によれば、(植民者の) 35,5%が人口10000人以下の街の出身であり、64,5%が都市の出身である。

^{vi} この表はMorin (1983:51)を参考に作成した。

^{vii} Walker (1984:52)は閉音節のコーダの子音が母音を伸張させるものであれば、/i, y, u/は[i, y, u]と実現されると述べている (ex. *vivre* /vivr/ > [vi:vɾ])。ただし、最近の研究であるCôté (2010b)ではそのようなことは言及されていない。このことから、閉音節における狭母音の弛緩が、さらに特定のコンテキストで二重母音化が起こることが可能になるという変化が生じた可能性が推測される。

^{viii} この例は、実際に筆者がモントリオールで耳にしたものである。

^{ix} Lodge (1997:208)を参照した。: « (...) celles de la *surnorme* résultent le plus souvent d’une codification explicite, sont imposées par le haut et nécessitent un effort d’apprentissage conscient. »